

多様な児童を対象としたグループプレイセラピーにおける プログラム内容と支援のあり方の検討

松藤光生 藤瀬教也 吉川昌子 岩男美美

Study on Program Contents and Support of Group Play Therapy for Diverse Children

Mitsuo Matsufuji

Noriya Fujise

Shoko Yoshikawa

Fumi Iwao

1. 問題と目的

発達障がいを始め、種々の障がいや社会的な不適応を有した児童への支援の方法の一つとしてグループプレイセラピーがある。この障がい児を対象としたグループプレイセラピーの意義と視点について遠矢(2006)は、行動コントロールの難しさを抱える児童に対して支援のニーズの高さとそのアプローチの方法としての集団の有用性を述べ、グループセラピーの場が子ども達にとって居場所となること、その中で友人関係形成の場があること、プログラムには、相互性の体験をもたらす要素があり遊び性を考慮する必要があること、セラピストは受容と共感の態度が重要であること、集団の均質性について考慮しなければならないことなどをあげている。ここで挙げられた点については、飯塚(2014)や柳ほか(2010)などの他のグループセラピーの実践においても共通して重要視されている視点と考えられる。特に集団の均質性については、遠矢(2006)で示されるように知的発達水準や生活年齢、行動や障がい特性を踏まえ、ある程度の均質性を持ったグループによって実践されている場合が多いと思われる。

ここでグループセラピーの一例として心理リハビリテーションにおける集団療法について述べる。心理リハビリテーションは、動作法の技法を中心した支援のあり方といえる。その支援の中心となってきた心理リハビリテーションキャンプは、動作法だけでなく、集団療法、生活指導、親の会、トレーナー研修が柱になっている。この中の集団療法に関して丸山(2011)は、「障害を持つ子どもが集団の中で自己表現ができるようになって、縮こまりがちな自己を解放し、なおかつ、その集団が、それらの自己表現を受け入れることのできるような場を作り、そこでトレーニーが得たものを動作訓練に繋げていくという役割」と述べている。心理リハビリテーションの枠組みで捉えた場合、動作訓練に繋げていくことがそ

の役割としてあるが、集団療法そのものに関しては、グループプレイセラピーと言えるものである。しかし心理リハビリテーションキャンプのトレーニーは、その年齢層、知的発達水準、障がい種などが多様となっており、その中で集団療法が実施されている。前述した遠矢が述べた他の視点は考慮することが出来ても集団の均質性に関しては、考慮することが困難な状況であるといえる。

また心理リハビリテーションでは、キャンプ形式で行われない訓練会も全国で実施されているが、そうした訓練会の中で集団療法を実施するかどうかに関しては、それぞれの訓練会によって異なっている。その中でもトレーニーの多くが児童の場合には、集団療法の時間を持つ場合も少なくないと思われる。その場合にも、集団の均質性への配慮が難しい中で集団療法を実施していることが考えられる。

障がいを抱えた児童への支援を考える場合、児童がどのような発達水準、障がい特性を抱えていたとしても、その児童の心理的な安定を図るための居場所や社会性を育てるための集団の場が必要になる。しかし相談の場に必ずしも、均質性を持った子どもが集まるということはない。そのため集団の場が必要と思われながらも、その場が提供されていない児童も少なくないと考えられる。先に上げた心理リハビリテーションにおける集団療法での支援のあり方を考察することにより、均質性を持たない児童集団における支援についての可能性について示唆を得ることが出来れば、集団の場が必要と考えられる児童に対してその場を提供する上での視点や配慮点を考えることに繋がるとと思われる。

本研究では、多様な児童が参加している動作法訓練会における集団療法について、事例として一つの実践を取り上げ、そのプログラムの内容、支援における視点等を考察することにより、多様な児童が参加するグループプレイセラピーにおける支援のあり方について考察を行うことを目的とする。

2. 方法

本研究では、A大学附属発達支援センターにて継続して実践されている動作法訓練会における集団療法を取り上げ、そのプログラム内容と参加児童の様子や変化から多様な児童が参加するグループプレイセラピーにおけるプログラム内容への配慮と支援における視点について考察を行う。

3. グループの概要

(1) 参加児童

動作法訓練会への参加は、発達支援センターへの相談申し込みがあった児童に対して、動作法が有用だと思われる場合、そのアナウンスを行い、保護者が希望した場合に参加となっている。現在参加している児童の概要については、表1に示し、表2にX年度4月～11月の参加の状況を示す。

なお表1上のAとB、CとD、EとF、JとK、MとNはそれぞれきょうだいである。表1に示された様に、参加している児童は、就学前～中学生と年齢の幅が広く、知的発達や障がい特性に関しても多様であり、目立った障がいや診断等のない児童もいる。そのため子どもや保護者のニーズも多様であり、それに伴いグループにおける狙いや配慮も多様となっている。参加している子どもの主なニーズとしては、動作法を受けたいということは概ね共通しているが、その背景としては、肢体不自由や姿勢の改善から行動や情緒のコントロールのためと多様である。また子どもの状態・特性として、①自信のなさや自己評価の低さを抱えている、②コミュニケーションの困難さを抱えている、③多動等の行動コントロールの困難さを抱えている、などが認められている。

表1 参加児童の概要

	年齢	診断等	在籍
A	小3		支援学級
B	小6	PDD	支援学級
C	小2		通常学級
D	中1	LD	支援学級
E	小3	ASD	支援学級
F	小5		通常学級
G	小2	ダウン症、感音性難聴	聴覚特別支援学校
H	小5		通常学級
I	年長	ASD	幼稚園
J	年長	脳性マヒ(独歩-)	児童発達支援センター
K	年長	脳性マヒ(独歩+)	保育所
L	年中	脳性マヒ(独歩+)	幼稚園
M	小1	ASD	通常学級
N	3歳		幼稚園未就園クラス

表2 各児童の今年度の出席状況

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計	
A	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18
B	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18
C	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19
D	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17
E	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17
F	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	16
G	○						○	○		○		○	○		○	○		○				9
H	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	17
I	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
J	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	15
K	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	15
L					見学		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
M	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	20
N													○	○	○	○	○	○	○	○	○	9

※Lは#7より、Nは#12より正式に参加

(2) グループの支援者

トレーナー、サブトレーナーは、A大学教育学部の1年生～4年生の学生であり、全員が保育者もしくは教育者を目指す学生である。児童一人に対して、一人のトレーナーが担当しており、トレーナーが欠席時は、サブトレーナーがトレーナーとして担当する。児童を担当していないサブトレーナーは、プログラムの進行の補助を行っている。

スーパーバイザーは、A大学の教員3名であり、全員が心理リハビリテーションスーパーバイザーの資格所持者である。また訓練会中の保護者に関しては、心理リハビリテーションスーパーバイザー資格所持者の助手が別室にして相談支援を行っている。

なお訓練会は、スーパーバイザー3名に対して児童を3班に分け実施している

(3) グループのプログラム

訓練会は、1時間で実施され、前半の30分を集団(療法)の時間として主にグループプレイセラピーを行い、後半の30分を個別(訓練)の時間として主に動作法を用いた支援を行っている。学生をトレーナーとしているため、大学の授業実施期間のみであるが、基本的に毎週実施している。

プログラムの狙い、目的に関しては、3-(1)で述べた様に参加児童が多様なため、全ての児童に共通した狙い、目的を設定することは困難である。しかしグループが参加児童にとって安心して過ごせる居場所となること、集団の中で楽しいと感じる肯定的体験をすることの2点に関しては、全ての児童、プログラムにおいて共通した狙いとなっている。その他の狙いとしては、①子どもが自己表現をし、それを他者に受け入れられ、認められ

る体験を積むこと、②子どもが他児、トレーナーとの関わりを通して適切なコミュニケーションの体験を積むこと、③時間やルールに合わせた行動を行うことで自己コントロールの体験を積むことの3点が挙げられる。

集団療法のプログラムに関しては、トレーナーが内容を考えたものを事前にスーパーバイザーに提出し、内容について指導を受けた上で実施している。表3にX年度

4月～11月まで実施の集団療法プログラムの簡単な内容について示す。なお表中の「制作」、「ルール遊び」、「協力」、「発表」とは、それぞれのプログラムの中で制作活動があったか、ルール遊びの活動があったか、他児と協力する活動があったか、他児に発表をする活動があったかを示している。

表3 X年度のプログラムの概要

実施回	プログラム名	内容	制作	ルール遊び	協力	発表
#1	旗づくり	それぞれの子どもが自分の好きな物などを書いた旗を作成し、それを合わせた物を各班の旗として作成する。	○			○
#2	お花畑を作ろう	画用紙や折り紙を用いて子ども達がそれぞれで花を作成し、それを壁に貼ることでお花畑を作る。	○			○
#3	こいのぼりを作ろう	紙皿と画用紙等を用いて鯉のぼりの置物を作る。	○			○
#4	ひっくり返しゲームをしよう	ダンボールで作成したオセロのコマを用いて、大人対子どもチームで時間内に自分のチームの色に返して勝負を行う。		○	○	
#5	輪投げをしよう	3種類の輪投げ遊びを用意して、班ごとにスタンプリ形式で回って遊ぶ。		○		
#6	おしゃべりカエルを作ってあそぼう	封筒を用いて手を入れて口を動かすことが出来るカエルのおもちゃを作成し、それを用いて班ごとにテーマに沿ったお話をする。	○			○
#7	ありがとうメダル	日頃お世話になっている人に対して、紙皿を用いて感謝の気持ちを伝えるメダルを作成する。	○			○
#8	カタツムリをつくろう	紙皿を用いてカタツムリの置物を作り、それを紫陽花を書いた模造紙の上において全体で鑑賞する。	○			○
#9	ボーリングをしよう	ペットボトルとボールを用いてボーリングをする。その結果に応じて星の形の紙をもらい、それを天の川に見立てたブルーシートの上に置き、橋を作る。		○	○	
#10	みんなで運ぼうアイスクリーム	他児と協力して、アイスクリームに見立てた風船を布の上に乗せて運ぶ。		○	○	
#11	夏祭りに行こう	お面のくじ引き、魚釣り、的当ての3種類のゲームを用意して、班ごとに回る。		○		
#12	冒険に行く準備をしよう	班ごとに渡されるヒントをもとに、指定された物を探すゲームを行う。		○		
#13	カラフルとんぼを作ろう	トイレットペーパーの芯と画用紙を用いてトンボを作成し、班ごとに班の中で他児に発表する。	○			○
#14	とんぼの運動会	投げて飛ぶトンボのおもちゃを用いて3種類のゲームを班ごとに行う。		○		
#15	運動会でおもいっすり身体を動かそう	班ごとにチームとなり、段ボールへの玉入れとお玉リレーを行う。		○	○	
#16	ミノムシの洋服を作ろう	画用紙で作成したミノムシに折り紙で飾りを作り、全体に提示した木に貼って鑑賞する。	○			○
#17	ハロウィンパーティー	ビニール袋で作成した服に飾り付けを行い、その衣装を着てダンスを踊る。	○			○
#18	どんぐりを作ろう	画用紙を用いてどんぐりを作成し、それを木に見立てたトレーナーに貼る。	○			
#19	みんなでどんぐりを集めよう	#4で行ったひっくり返しゲームと#10で行った風船を運ぶゲームを行いどんぐりを集めて、それを模造紙に書いた木に貼る。		○	○	
#20	秋の紅葉を作ろう	画用紙に木を書き、ダンボールで作成したスタンプを用いて紅葉を作成する。	○			○

4. プログラムの内容と子どもの様子

表3に示した様にプログラムの内容は、大きく分けて①制作・発表を行う内容と、②ルール遊び・協力を行う内容に分けられる。以下、それぞれの内容ごとの参加児童の様子や変化について述べる。

(1) 制作・発表プログラムで児童の様子

制作・発表を行うプログラムでは、基本的に担当トレーナーと児童が二人で制作を行うことが多く、他児との関わりが少なくなってしまうことが多い様子が認められる。しかし#13以降の回では、用具の貸し借り等で児童同士の関わりが多く認められる様になってきている。また年長児が年少児に道具の使用や選択を促すなど配慮する様子も認められる様になってきており、#13ではMが机から離れて制作をしていたGに対して道具を持っていくなどの様子も見られていた。

またEなど自信のなさを抱えている児童は、制作の取り組みまでに時間がかかることも多く、X-1年度などは、制作自体に取り組めない様子も認められていた。しかしX年度では、取り組みまで時間がかかっても、時間内に完成出来ることがほとんどであった。その際には、同じ班の児童が制作している物を観察し参考にしている様子も認められていた。

また参加している児童の多くは、その自信のなさや不安の高さから全体に対しての発表を行うことは困難なことが多く、全体での発表に関しては、IやMなど決まった児童のみが行っているのが現状である。しかし#8や#20の様にプログラムの流れとして全体に対して制作物を提示することには、抵抗がなくなっている様子である。また#6や#13では、班ごとに別れての発表活動を行っており、その際には、普段全体への発表を拒む児童であっても発表を行えている様子も認められた。

(2) ルール遊び・協力プログラムでの子どもの様子

ルール遊びでは、行動コントロールの難しさを抱える児童の場合、ルール説明の前に道具に手を出したり、失敗した場合にやり直しを行ったりするなどのルールの逸脱が認められていた。しかし#15や#19では、活動前に道具を扱うことがあっても、トレーナーの促しにより道具をもとに戻し、ルールに沿って遊ぶことが出来ている。

#5、#9、#11、#14では、全体で進行するのではなく、班ごとに活動を行っていたが、その際に班として一緒に動くという意識を持っている児童は少ない様子であった。しかし#10や#15、#19など他児と協力したり、班同士が競う内容があると、班の他児を意識した様

子が認められ、BやDなどの年長児は、同じ班の年少児に順番を譲ったり、道具を渡すなど配慮をする様子が認められていた。

身体運動面や知的発達面についての差が大きいため、同じ水準の活動を行うことは困難な状況であり、児童によって簡単過ぎることや、同じ活動でも難しすぎる場合が認められていた。身体運動面が要求される#5や#9などでは、投げる位置を変えるなどの配慮を行っていたが、それでもJなど肢体不自由を抱える児童には難しい様子が認められていた。また#12では、ヒントから答えを導き出すという知的な面が要求されるが、その際にもヒントを段階的に複数用意するという配慮を行っていた。しかしそれでもFやHなどは、比較的早く答えを導き出していたが、GやNには難しく、取り組んでいる間、他の児童が持つ時間が生じてしまっていた。しかしその際には、Mが手助けをしようとする様子を見せ、またその他の児童も待つことに不満を見せる態度は認められなかった。#15や#19などチームで協力して競うようプログラムでも、他児の失敗を非難する行動や発言は、全く認められず、他児の失敗や行動が遅くて待つことになっても許容する様子が認められている。

5. 考察

(1) プログラムの内容と狙いについて

全20回の内制作を主とした内容が11回、ルール遊びを主とした内容が9回と制作を主とした内容の方が若干多く実施されていた。制作を主とした内容の場合、多くが発表活動も行っており、そのプログラムの中では、子どもたちは制作や発表という中で自己表現をし、それを他者に受け入れられ認められる体験を積むことが狙いになっているといえる。制作を行うことにより自己表現を行うことに関しては、その狙いが達成されていると考えられる。しかし全体に対しての口頭による発表という形での自己表現に関しては、一部の児童しか行えていない。その背景には、自信のなさや不安の高さがあると考えられるため、まずは班などの小集団での発表を行うことや自分が制作した物を他者に提示したり複数人で一つの物を作成したりするなど非言語的な方法での自己表現を積み重ねることが必要であると思われる。そのことにより柳ほか(2010)が述べる様に、非言語的な活動によって自分のことを表現することによって安心して自己表現を出来る機会を作っていくことにつながると考えられる。しかしグループ全体の狙いとして、児童の居場所となること、そして子どもが肯定的体験を積むことを前提としているため、自己表現を行う際には、あくまで子どもの主体性を尊重して行うことが必要になる点を重視する必

要がある。

また制作活動の中では、道具の貸し借り等での他児との関わりも認められていた。その点を考慮すると、活動の狙いとして子どもが他児・トレーナーとの関わりを通して適切なコミュニケーションの体験を積むことや時間やルールに合わせた行動を行うことで自己コントロールの体験を積むことを制作活動の中で設定することも可能であると思われる。制作活動の際のハサミや糊等の道具をあえて人数分用意しないことによって児童同士の間で自然な形で道具の貸し借りや児童が順番を意識し、他児を意識することも可能であると考えられる。そのことが道具を貸す-借りるという形で遠矢(2006)の述べる“相互性”の体験を自然と促すことに繋がるといえる。

ルール遊び活動を主とする内容では、協力活動がある活動が6回、ない活動3回となっており、班ごとの活動の場合は、協力する活動がない場合となっていた。ルール遊び活動の中では、子どもが楽しいと感じる肯定的体験を積むことと時間やルールに合わせた行動を行うことで自己コントロールの体験を積むことが主な狙いとなるが、児童の多くは、トレーナーの支援があればルールからの逸脱を行うことなく活動を行えている。その点を考慮した場合、ルール遊び活動の中では、他児と関わり協力する内容を極力含める様にし、他者とのコミュニケーションの機会を設けることによって、適切なコミュニケーションの体験を積むことも狙いとするのが可能である。また他児との関わりを持つことや前述した“相互性”の体験にも繋がると考えられる。しかし児童同士の関わりが増え、子ども同士のトラブルが生じる可能性が増えることも予想される。そのような際には、飯塚(2014)が述べる様に、子どもの気持ちに寄り添いつつ状況の説明をしたり他児の気持ちを代弁するなどの支援が必要になるとと思われる。

(2) 多様な子どもがいるグループプレイセラピーでの支援について

多様な子どもがいるグループの場合、ルール理解や身体運動機能が要求されるプログラムではどうしても児童それぞれにとっての難易度に差が生じてしまうことが考えられ、実際にそういった様子も認められていた。グループでの活動の中ではそういった点を考慮し、子どもによってルールの変更や道具の変更等を行う配慮を行っていたが、それでも児童によって取り組みに時間の差が生じる様子が認められていた。しかしながら実際のグループでは、そういった際でも他児は、非難することや不満な様子を見せることはなかった。これは、多様な児童が参加していることが参加児童にも分かっており、そのことを自然と受け入れているとも考えられた。様々な年齢や特

性を抱えた児童がいることは、見た目にも明らかなことであり、そのことが誰だって参加していい場所、いい居場所として児童にとっての安心感につながっているとも言える。また年長児が自然と他児を配慮する様子も認められており、日常的に支援を受けることが多い児童であっても、他児を意識し日常とは異なる役割を取ることが出来る場になるとも考えられた。一方でそのような場合には、特に年長の児童が他児に配慮する中で、自分の要求を過度に抑え我慢をしてしまうことも考えられる。そうなってしまった場合、グループが居場所として機能することや児童が肯定的体験を積むことが出来ない可能性もあるため、それぞれの担当トレーナーは、児童それぞれの思いや要求について常に目を向けて置くことが必要になるとと思われる。

(3) まとめと今後の課題

本研究では、多様な児童が参加するグループプレイセラピーでの一事例を取り上げ、そのプログラムの内容と児童の様子からその支援のあり方について考察を行ってきた。結果として、多様な児童が参加するグループプレイセラピーにおいては、その活動の内容によって配慮点が異なることが考えられるが、適切な配慮を行うことで、それぞれの参加児童に多様な体験を経験させることが出来ることが示された。加えて多様な児童が参加するからこそ、児童にとって安心した居場所となり得る点や参加する児童が多様な役割を取ることが出来る可能性がある点も示された。一方で、多様な児童が参加している場合、個々に応じた配慮を行うことが困難であること、児童に我慢を強いてしまう可能性があるという点も示された。グループプレイセラピーにおいて均質性がないことによる利点も示されたと考えられるが、同時に活動内容や個々への支援の困難さも示されたと考えられる。

今後の課題としては、本研究では、児童に対して直接支援を行っているトレーナーの支援の意図や視点については扱えなかったため、実際に観察された児童の様子に加え担当したトレーナーから児童の理解や支援について聴取することにより、より深い児童の理解や支援のあり方について検討することが可能になるとと思われる。また本研究で扱ったグループは、多くのきょうだい児が参加していたが、きょうだい児の支援という点について扱うことが出来ていない。きょうだい児が同じグループに参加し、それぞれに担当トレーナーがいる中で対等に活動に参加することは、きょうだい児の支援という点でも意味があると考えられるため、今後検討が必要である。

謝辞

本研究を行うあたり、日頃グループに参加して様々な姿を見せてくれている子ども達、忙しい中子ども達を連れてきてくださっている保護者の方々に感謝申し上げます。

引用文献

- 柳知盛・神野陽介・豊丹生啓子・遠矢浩一・針塚進（2011）アスペルガー障害を伴う小学校高学年児童のための集団心理療法プログラム，九州大学総合臨床心理研究，2 特別号，71-83
- 飯塚一裕（2014）アスペルガー障害を伴う小学校高学年児童のための集団心理療法プログラム，愛知教育大学臨床総合センター紀要，5，51-56
- 遠矢浩一編著・針塚進監修（2006）軽度発達障害児のためのグループセラピー，ナカニシヤ出版
- 丸山千秋（2011）心理リハビリテーションキャンプの運営についての検討－心理リハビリテーションキャンプにおける集団療法－，教育人間科学紀要，2，133-144